ドン・ファンの源流

石井正人
Masato ISHII

Ⅰ.

中世ヨーロッパ文学において愛好された物語素材といえばアーサ王伝説とトリスタン伝説であったが、近世に入り、16～17 世紀になると、ドン・フアン伝説とファウスト伝説が流行するようになる[1]。（文学研究史上は「伝説」よりも「神話」という言い方の方が良く使われているようだが、好みの問題で本稿では「伝説」を使うことにする。）

これにハムレットとドン・キホーテを加えて、近代ヨーロッパ文学の４大神話とする俗説もあるようだ[2]。これもまた一理あるが、さらにナルキッソスはどうだ、イカロスはどうだ、ピグマリオンを忘れていないかと議論が進むことには賛成しない。古典古代の文学素材の借用ではなく、ここでは中世以降生まれた伝説の発展に注目したいと思うからだ。

ドン・フアンとファウストに話を戻せば、グラッベ Christian Dietrich Grabbe (1801-1836) に至っては『ドン・フアンとファウスト』Don Juan und Faust (1829) という作品を残しているほどで、この作品の中のドン・フアンとファウストの掛け合いも興味深いが、この作品の最後で死の使いの言葉が、まことに簡にして要を得る、文学史的総括になっている。

Dich aber, Juan, reiß ich mit mir, – schmiede
Dich an den Faust – Ich weiß, ihr strebet nach
Demselben Ziel und karrt doch auf zwei Wagen![3]

フアン、だが私はお前を連れていくぞ　―　お前を
あのファウストに繋ぎとめてやる　―　私は知っているのだ、お前たちは
同じ目標を目指している、別の車を走らせているが。

ドン・フアン伝説の骨格と言えば、実際にはいたってシンプルなものである。どこまでも現世の肉体的・物質的享楽を追求し、神を恐れず、義理・人情・道徳・権威を顧みず、

[1] Müller-Kampel, Beatrix (Hrsg.): Mythos Don Juan, Reclam, 1999, S.17.
[2] Helmes, Günter/Hennecke, Petra (Hrsg.): Don Juan, Dichtungen, 50 Variationen eines europäischen Mythos. Igel, Hamburg, 1994/2011, S.432.
[3] Grabbe, Christian Dietrich: Don Juan und Faust. Frankfurt am Main : Hermann, 1829, S.222.

罪の限りを尽くした一世の反逆児ドン・フアンが、思い上がりの極みに死者を嘲笑して食事に招待するなどの行為に及ぶや、ついに罰を受け、本当に招待に応じて現れた死者によって地獄へと引きずりこまれて滅びる、というお話である。

この、現世の享楽を追求して滅ぶ反逆児、という人物像がいたく近代の芸術家を魅了した。———「少者(わかきもの)よ汝の少(わか)き時に快樂(たのしみ)をなせ。汝の少(わか)き日に汝の心を悦ばしめ汝の心の道に歩み汝の目に見るところを爲せよ。但しその諸(もろもろ)の行爲(わざ)のために神汝を鞫(さば)きたまはんと知べし。然ば汝の心より憂(うれひ)を去り、汝の身より惡き者を除け。少(わか)き時と壯(さかり)なる時はともに空(くう)なればなり。」（旧約聖書『傳道之書』11.9-10）ということに尽きるのだが、神の裁きだの教会からの道徳の押しつけは否定したい、「人間本性」の赴くままに（＝男のわがままのままに）現世の快楽を汲み尽くしたい、さりとて道徳的反省と滅びの予感にも存分に悩みたいという、近代的知識人の贅沢な要求に応える器としてドン・フアンはとても気に入られたのだ。

ドン・フアンの滅びのパターンにはさしてヴァリエーションはないが、現世の享楽を追求する反逆児、という点で芸術家達はこぞって腕を振るう。華麗な偽りの恋愛遊戯の絵巻物。死の客、石の客である騎士長の娘ドンナ・アンナを中心に、別の貴族の娘イザベラあり、漁師の娘ティスベアあり、婚約者のいる村娘のアミンタあり、娼婦あり。

また道徳やしきたりや女性の気持ちを軽蔑してみせるドン・フアンの人物造形にも力がこもる。

近代文学におけるドン・フアン伝説の元祖、ティルソ・デ・モリーナのドン・フアンからして、高らかに「色事師」と呼ばれるのを誇ってみせる[4]。

> 「セビーリャでは人がおれのことを声高に色事師と呼ぶのも、女を騙し、傷つけ、捨てるのが無上の喜びだからだ。」（佐竹謙一訳 62 頁）

> Sevilla a voces me llama
> el Burlador, y el mayor
> gusto que en mi quede haber
> es burlar una mujer
> y dejalla sin honor. (p.55)

そしてリフレインのようにこう言う。

---

[4] Tirso de Molina: El Burlador de Sevilla/ José Zorrilla: Don Juan Tenorio, studio y notas por Begoña Alonso Monedero, Santillana, Madrid, 1995.
ティルソ・デ・モリーナ（佐竹謙一訳）『セビーリャの色事師と石の招客　他一編』岩波文庫、2014年。

「死後だって？なんて気の長い話だ！まだまだずっと先のことでは？」（佐竹謙一訳 67 頁）

¿En la muerte?
¿Tan largo me lo fiáis?
De aquí allá hay gran jornada. (p.59)

「なんと気の長い話だ、それより女を誑かすのが先決だ。」（佐竹謙一訳 94 頁）

Si tan largo me lo fiás,
vengan engaños.(p.77)

極めつけはモリエールが描くところのドン・ジュアンだと思うのだが、いかがであろうか[5]。

「何だって？お前は最初に惚れた女と何時までも手を切るな、その女のためなら世間を捨てて、誰にも目を付けるなと言うんだな？節操などという偽りの名誉を鼻にかけ、一つの恋に未来永劫埋もれて、若い頃から見とれるようなどんな美女にも目をつぶれとは結構なことさ。いやなこった。節操を後生大事にするのは馬鹿者だけさ。美女に惚れてどこが悪い。俺はな、美しい女を見たら、その場でぞっこん、女の甘い暴力にすぐさま万歳を決め込んで、言いなり放題。契りなどとは無縁なやからさ。美女を一人愛しちまったからといって、他の女に不義理を決め込む道理はあるまい。どんな女にも美点はあるし、この点に付いちゃ俺は目利き。造化の神の命ずるままに敬意と賛辞を浴びせてやるのさ。いずれにしてもだ。自分で愛らしいと思ったものを諦めることはない。美しい女に望まれたら、俺に心が一万あれば、そいつを全部くれてやる。要するにだ。芽生えたばかりの恋心は、えも言われぬ魅力があるものさ。成り行き次第、そこに恋の楽しみがあるというわけだ。お世辞をさんざ浴びせて、若い娘の心をなびかせる。日一日と少しずつ効き目はいかにと見届ける。熱意と涙と哀願でめったに落ちない純情なおぼこ娘を攻め落とす。若い女のか弱い抵抗を一歩一歩陥落させ、後生大事と守っている操を打ち破り、女を優しく脅しつけ、好きなところへ連れて行く。これが無上の楽しみさ。だが、一度手に入れれば、文句も望みもありゃしない。うるわしの恋もそれで終わり。安穏な愛の中で惰眠をむさぼる。新しい女によって欲望が目覚め、えも言われぬ魅力でむらむらと征服欲が掻き立てられるまではな。ともあれ、美しい女の抵抗を打ち破る、これほどの楽しみはありやしない。この点に

[5] Molière: Dom Juan ou Le Festin de pierre. Comédie en cinq actes. Übers. u. hersg. v. Hartmut Stenzel, Französisch/Deutsch, Reclam, Stuttgart, 1989/2012, S.14-16.

関しちゃ、俺の野心は、たえず勝利から勝利へさすらい、おのれの願望をとめられぬ征服者のようなものさ。俺の激しい欲望をとめられるものなどありやしない。俺はこの世を丸ごと愛してしまう気でいる。アレキサンダー大王のように、恋の征服を拡げるためなら、他の世界があればとさえ願っているのだ。」（金光仁三郎訳）[6]

“Quoi! tu veux qu'on se lie à demeurer au premier objet qui nous prend, qu'on renonce au monde pour lui, et qu'on n'ait plus d'yeux pour personne? La belle chose de vouloir se piquer d'un faux honneur d'être fidèle, de s'ensevelir pour toujours dans une passion, et d'être mort dès sa jeunesse à toutes les autres beautés qui nous peuvent frapper les yeux! Non, non, la constance n'est bonne que pour des ridicules; toutes les belles ont droit de nous charmer, et l'avantage d'être rencontrée la première ne doit point dérober aux autres les justes prétentions qu'elles ont toutes sur nos cœurs. Pour moi, la beauté me ravit partout où je la trouve, et je cède facilement à cette douce violence dont elle nous entraîne. J'ai beau être engagé, l'amour que j'ai pour une belle n'engage point mon âme à faire injustice aux autres; je conserve des yeux pour voir le mérite de toutes, et rends à chacune les hommages et les tributs où la nature nous oblige. Quoi qu'il en soit, je ne puis refuser mon cœur à tout ce que je vois d'aimable; et, dès qu'un beau visage me le demande, si j'en avois dix mille, je les donnerois tous. Les inclinations naissantes, après tout, ont des charmes inexplicables, et tout le plaisir de l'amour est dans le changement. On goûte une douceur extrême à réduire, par cent hommages, le cœur d'une jeune beauté; à voir de jour en jour les petits progrès qu'on y fait; à combattre, par des transports, par des larmes et des soupirs, l'innocente pudeur d'une âme qui a peine à rendre les armes; à forcer pied à pied toutes les petites résistances qu'elle nous oppose; à vaincre les scrupules dont elle se fait un honneur, et la mener doucement où nous avons envie de la faire venir. Mais, lorsqu'on en est maître une fois, il n'y a plus rien à dire ni rien à souhaiter; tout le beau de la passion est fini, et nous nous endormons dans la tranquillité d'un tel amour, si quelque objet nouveau ne vient réveiller nos désirs et présenter à notre cœur les charmes attrayans d'une conquête à faire. Enfin, il n'est rien de si doux que de triompher de la résistance d'une belle personne; et j'ai, sur ce sujet, l'ambition des conquérans, qui volent perpétuellement de victoire en victoire, et ne peuvent se résoudre à borner leurs souhaits. Il n'est rien qui puisse arrêter l'impétuosité de mes désirs; je me sens un cœur à aimer toute la terre, et, comme

[6] ジャン・ルーセ（金光仁三郎訳）『ドン・フアン神話』審美社、1988 年、229-230 頁より。

Alexandre, je souhaiterois qu'il y eût d'autres mondes pour y pouvoir étendre mes conquêtes amoureuses.”

ヨーロッパ近代文学におけるドン・フアン作品の元祖、ティルソ・デ・モリーナが 1630 年に『セビリアの色事師と石の客』Tirso de Molina: El Burlador de Sevilla y Convidado de Piedra (1630) を発表して以来、最新の諸作品まで 400 年近くこの伝統は続いている。

演劇だと Max Frisch: Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie (1962) が最新作品かと思っていたら、Julian Schutting: Eingefleischter Weibsfleischfresser (1994)という作品があった。散文作品だと Barbara Bronnen: Donna Giovanna (1994)、韻文作品だと Heinz Hiebler: don juan (fragmente) (1992) があった。(この fragmente というのは括弧も含めてタイトルの一部である！)

この間に何らかの形でドン・ファン伝説に手を出した、きらびやかな名前が並ぶのである。モリエール、マリネッティ、グラッベ、プーシキン、ミュッセ、モーツァルト／ダ・ポンテ、デュマ、ボードレール、トルストイ、バーナード・ショー、ロスタン、ウナムーノ、アヌイ、E・T・A・ホフマン、バイロン、メリメ、ゴーチェ、ジョルジュ・サンド、フローベール、メーリケ、アポリネール、チャペック、ビュトール、バジェステル…

これらについてはドイツ語・英語・フランス語でそれぞれ優れた解説のついたアンソロジーが編まれている[7]。これを改めて読み直し、近代現代ヨーロッパ文学の基盤に対する理解を深めるのは重要なことであると思う。私がその一助としてここに扱うのは、ドン・フアン伝説の歴史を逆にたどる事、すなわち、その現存最古の史料から、この伝説の原型と変容の本質を探ることである。

II.

ドン・フアン伝説の源流については、レアンダー・ペツォルト Leander Petzoldt の包括的な研究が先ごろ再版された[8]。ペツォルトは、『メルヘン辞典』Lexikon des Märchens、

---

[7] Helmes, Günter/Hennecke, Petra (Hrsg.): Don Juan, a.a.O.
Mandel, Oscar (ed.): The Theatre of Don Juan, A Collection of Plays and Views, 1630-1963, University of Nebraska Press, Lincoln/London, 1993.
Müller-Kampel, Beatrix (Hrsg.): Mythos Don Juan, a.a.O.
ジャン・ルーセ（金光仁三郎訳）『ドン・フアン神話』前掲書。

[8] Petzoldt, Leander: Don Juan Tenorio. Zur Vorgeschichte des Don Juan-Stoffes in der europäischen Volksüberlieferung. Peter Lang 2013.
同書 301 頁にわざわざ編集上の注記 Editorische Notiz があり、改訂版の出版に到った経緯が説明されている。そこでドン・フアン伝説は今日でもなお「伝染性がある virulent」のだと述べた箇所に付けられた注 774 に、1985 年のローマ教皇庁列聖省の発表について書かれている。毀誉褒貶の烈しい教皇ピウスⅨ世と並び、ドン・フアンのモデルとされている 17 世紀スペインの人 Miguel Manara Vicentelo de Leca y Colona が尊者の称号を与えられたというのである。場合によっては福者から聖人へと進む可能

『ドイツ語格言的慣用句辞典』Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten の編著者として著名な、この分野に関わる者なら必ず何らかの形でお世話になる民俗学の大家ルッツ・レーリヒ Lutz Röhrich の弟子で、ジュネーブ大学教授を務めた、ヨーロッパ民俗学会の長老である。

ペツォルトが 1964 年にマインツ大学でレーリヒの下で完成させた博士論文が、そもそもドン・フアン伝説の源流となる「死の客」説話に関する研究であった。ヘルシンキで出版されたこの博士論文の改訂版がこのたび装いも新たに、タイトルも変更してドン・フアン伝説の源流に関する研究であるということを明確して、ドイツで再版されたのである。さてペツォルトによれば、ドン・フアン伝説の源流となった「死の客」伝説は、中世の説話から発して次の 4 つの流れをたどったようである。

A. 中世の道徳説話―いわゆる「死の客」伝説：酔っ払って髑髏を食事に招待するという、死者を冒瀆する不埒なまねをした者が、実際に死者の来訪を受け、さらに死者から返礼の招待を受けるなど恐い目にあって改心する。

B. レオンティウス伝説：死者を冒瀆して罰せられる者が、レオンティウスという道徳的反逆児に固定された伝説となる。（道徳的反逆に性愛が含まれないという点でドン・フアン伝説と異なる）

C. ドン・フアン伝説：死者を冒瀆して罰せられる者が、ドン・フアンという道徳的反逆児に固定された伝説となる。（道徳的反逆が性愛一本槍であるという点でレオンティウス伝説と異なる）

D. 絞首台伝説：死者への冒瀆が、絞首刑となって晒されている罪人への冒瀆に固定された伝説となる。

中世説話の原型（A）における、罪人のイメージを膨らませるか（B, C）、その場の具体的な罪と罰の話を膨らませるか（D）、大体こういう発展を遂げたということらしい。

結局罪人のイメージをどこまでも膨らませる方向に近代文学の関心は排他的に向かっていった。罪と言えばとにかく性愛の問題、エロスの方向に話が偏っていく辺りに、近代文学のある種のさもしさ・狭さがよく表れているようにも思われる。しかし飽きもせず新作が生み出されているのである。この点こそドン・フアン伝説の核心だと思われるので、本稿の最後にもう一度論ずることにする。

性も出た、というわけである。ピウスⅨ世はその後福者に列せられたようだが、ドン・フアンのモデルがどうなったかは分からない。

そもそもドン・フアン伝説の源流を探ろうという研究課題が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて提起されたのは、19 世紀末の段階で、ドン・フアン伝説が愛好されてしきりとヨーロッパ中の文学作品に取り上げられる傍らで、上のＢとＣの伝承が同時多発的にヨーロッパ各地で発生していることが知られていたからである。

Ｂのレオンティウス伝説がイエズス会演劇の作品として上演された最古の記録が 1615 年、ドイツのインゴルシュタット（ドイツ南部、バイエルン州の都市）であった。その直ぐ後、1630 年に、Ｃの最初を飾るティルソ・デ・モリーナの『セビリアの色事師と石の客』がスペインのマドリッドで初演されている。Ｂ史料を収集整理したヨハネス・ボルテ Johannes Bolte が、これらの事実は、このドン・フアン伝説の源流がすでに中世には存在して、しかも広くヨーロッパ中に広がっていたことを推定させると 1899 年に論じるに到った[9]。

この「ボルテ予想」の 10 年後の 1909 年に、旧ドイツ帝国シレジア地方（現在はポーランドのシロンスク地方とチェコのスレスコ地方）の文化史・民俗学研究者のヨーゼフ・クラッパー Joseph Klapper がＡの中世説話におけるドン・フアン伝説の最古（14 世紀中頃）の史料を、何と東ヨーロッパのシレジアに残されていた古文書の中に発見した[10]。

近代に入って「滅亡する色事師」というこのドン・フアン伝説のテーマが普遍的な関心と興味を強く引き起こすことになるが、そのはるかに以前から、中世ヨーロッパにおいてカトリック教会のネットワークにのり、この伝説の原形は凡ヨーロッパ的に広がり、親しまれていたものであるらしい。

こうして百年前に新資料の発見が続く中、ドン・フアン伝説の源流を探る研究が時ならず活況を呈したが、現代のドン・フアン研究においてこの成果が顧みられ、利用され、さらに発展させられることがほとんどないように思われる。物語素材の伝承は、国際交流が進む中、今日改めて世界的に重要な人文科学の研究課題であることを考えると、ドン・フアン伝説の源流を問い直し、そこから近代以降のこの素材の受容と発展の問題性を明らかにすることの意義は大きいと思う。

ともあれ、ペツォルトの研究が明らかにした上の流れに沿ってドン・フアン伝説の発展を確認していきたい。中々目に触れる機会の少ない史料が多いので、煩を厭わずなるべく全文を引用し、全訳を付けることにする。

---

[9] Bolte, Johannes: Über den Ursprung der Don Juan-Sage, in: Zeitschrift für Vergleichende Literaturgeschichte XIII (1899). S.374-398.

[10] Klapper, Joseph: Eine Quelle der Don Juan Sage, in:Studien zur Vergleichenden Literaturgeschichte IX (1909).S.190ff.

III.

ドン・フアン伝説の原形、中世説話ヴァージョンの最古の史料は、これを Joseph Klapper が発見して校訂版を出版した 1911 年当時はドイツのブレスラウ（現在はポーランドのヴロツワフ）大学図書館が所蔵していた写本 I.F.115 の第 204 葉裏面第 2 列から第 205 葉表面第 2 列にわたって書き残されていたラテン語のものである[11]。

最初にお断りしておくが、旧ブレスラウ大学所蔵の写本について本稿で歯切れの悪い言い方をすることになるのは、私にポーランドに実地調査に行く余裕がなく、これらの写本が戦火を逃れて現存しているかどうか確認できなかったからである。以下の記載はクラッパーによる。

この写本自体は第 1 葉の記述によれば、1485 年の段階にはブレスラウのドミニコ会修道院のものであった。（ドイツの諸大学が所有する他の多くの写本と同じ運命をたどり、1810 年に「教会財産没収 Säkularisation」によってこの修道院自体が廃止され、同修道院が所有していた写本群はブレスラウ大学に移された。）15 世紀後半のその段階で古い写本を 2 つ綴り合わせて再製本したらしく、前半の第 1 葉から第 159 葉までと、後半の第 160 葉から第 206 葉までとで写字生が代わっていて、後半の方がより古く成立したものと思われる。この写本には教訓説話が収集されていて、ある程度の分類が行われていた。他の写本との平行伝承や、年代の確定できる事実の書き込みなどから比較検討すると、この写本の後半部分は 14 世紀の中頃に成立したものと推定される。

その根拠となる事情は、以下の通りである。この写本に含まれる多くの説話は、他では 1911 年当時ロンドンの大英博物館所蔵であった写本 Additional 18929 にのみ伝承されていたそうだ。ただしここにはドン・フアン伝説の原形となる説話は含まれていない。このロンドンの写本は、14 世紀の初めに成立したものと推定され、しかもドイツのエアフルト（中部ドイツのテューリンゲン州の都市）の聖ペトロ修道院に由来するものだということが分かっていた。ブレスラウの写本の後半部分は、14 世紀の中頃に、この「エアフルト―ロンドン写本」（ないしその原本）を引き写しつつ、独自に集めた他の説話を加えてブレスラウで成立したものと思われる。ドン・フアン説話はこの段階で加えられたのであろう。

では、それは何処からだろうか？――それを推測する手掛かりがないわけではないが、その話は後にし、とりあえず今知られている最古、14 世紀中頃のドン・フアン伝説の原形を下に紹介しておく。

＜死者のお骨を辱めてはならぬこと、また特に酩酊者への戒め＞

ある酒飲みが墓地の近くに住んでおり、毎晩酔ってはその墓地を通り抜けて帰るのだ

[11] Klapper, Joseph: Erzählungen des Mittelalters. 1914, Breslau, Nr.164, S.356ff.

った。ある夜、家に帰ろうとして、墓地を通り抜けていたところ、そこで髑髏を見つけた。酔って上機嫌のその男は、こう語りかけた。哀れな髑髏さんよ、何をまたそんなところに寝転んでいるんだね。私の家にいらっしゃいよ、食事を用意してあげよう。すると彼に髑髏が答えた。先に行ってくれ、付いていくから。これを聞くと、男は震え上がった。そしてすっかり酔いが覚めてしまった。家に戻ると、その酒飲みはひどく震え、火の側に座り込んだ。そして家の入口を固く閉ざすように言いつけた。それからその男が食卓に付くと、何があっても、誰も家の中に入れてはならないと、一緒に食卓に付いた者達に言い聞かせた。すると、見よ、突然家の入口を烈しく叩き、主人に面会を求め、自分はこの家の主人に招待されたのだと言う者が現れた。みな恐ろしくて黙っていたが、そのうちの一人が、主人は留守です、と言うと、入口を外から叩いていた者は、本当は中にいる主人に言うが良い、ここを開けろと、さもなくば、自分にはそれが可能だが、力尽くで入り込むぞと。これを聞いた主人は、主の憐れみに全てを委ね、入口を開けるように言った。するとその場にいた者達は、哀れな死者の格好をした者が入ってくるのを見たが、骨と髑髏から肉はすっかり溶けて落ち、スジと皮が張りついているばかりで、これを見て皆震え上がってしまった。その死者は手を洗うと、求められなかったが先ず食卓の、主人と主人の奥さんの間に席を取り、何も食べず、何も飲まず、何もしゃべらず、その恐ろしい外見で皆を苦しめた。そして食事の後、主人に向かい、別れを告げて言った。食事に招待されて来たけれども、私には必要のないことだった。もしお前が、愚かな酔った声で私のことをからかわなかったら、私もここまで恐ろしい姿でお前のもとにやって来ることはなかっただろう。今回はこれでお別れとするが、お前が私を招待したあの場所で、私もお前のことを食事に招待しようと思うので、一週間後に来て貰おう、望むと望まざるに関わらず、来るのだぞ。こう言うと、死者は姿を消した。これを聞くと主人は一族全員と共に慌てふためき、この災難から逃れるための助言を知恵ある者達から得ようとしたが、ただ言って貰えたのは、家のことを整理し、改心して告解し、秘跡に与って身を守り、指定された時間に、神の裁きを待て、ということだけだった。そこで彼はその通りにし、指定された時間に、ゆかりの人々全員とやって来ると、突然強い風に飛ばされたが、体に何も傷つけられることなく、たいへん快く美しいが、荒れたお城に連れて行かれた。その中へ入っていくと、あらゆる種類の食べ物がのせられた食卓があった。その後あの死者が前と同じ様子で現れ、男に優しく挨拶すると、男を前に置かれたその食卓に付かせたが、自分は、隅の方に押しやられた、黒いパンと貧しい灯りしかない、薄汚れた布のかかった薄汚れた食卓に付き、あの死人はその食卓の席に腰を下ろすと、鬱屈し悲しげな様子で、立派な食卓に付かせた男の方を見つめた。死者のこの様子を見ると、男は驚きと恐れの余り何も食べることが出来なかった。最後に死者は立ち上がると、よそ者である男の所へやって来て、言った。なぜお前は私に何も尋ねようとしないのか。男は死者に答えていった。悲しみの余りに私はそんなことも出来ません、

というのも私は、これから自分がどうなるのか、全く分からないのですから。しかしあなたは私がどういう目に遭うことになるのか知っているでしょうから、教えて貰いたいと思います。すると死者は答えて言った。恐れることはない。お前は滅びるわけではない。それらのことは、お前を正すために、神の御心から起こったことだ。お前が死者の決まりに従い、私を愚かにも招待するなどということをしでかさねれば、こんなことはお前の身に起こらなかっただろう。しかし私の事情についてはお前も知っておくがよい。私はお前が住んでいるあの町で、かつて裁判官を務めていたが、ミサに与るのを怠り、何時も飲んだくれていた。けれども私の裁判官としての仕事は公正だったので、こうして慈悲を受けることが出来た。これは私の償いなのだ。現世に執着した償いに、荒れ果てた城に住み、鯨飲の償いに、貧しく薄汚れた食卓に付いている。さあもう無事家に戻り、お前の罪を敬虔な行いで滅ぼすがよい。こう言うと、また風が吹き、男を掠った場所に連れ戻した。そこには男の家族が泣き濡れていた。男が戻ってきて、しかも美しく変身しているのを見ると、みな驚いて逃げ出した。釘が手にも足にも刺さって鷲の爪のようになっていたし、彼の顔は恐れの余りに、黒く、恐ろしく、険しく見えたからで、彼だと分からないほどであったが、ほんの半時間ばかり姿を消しただけだったが、千年もの時が過ぎたように思われたのだった。彼に呼び戻され、順序立てて事情を話して聞かされると、人々は神を称えた。その後彼は徳のある立派な人間になり、清く正しい生涯を終える恵みを受けた。

Visio, quod ossa mortuorum non sunt deridenda, et contra ebrios.

Erat quidam bibulus, iuxta quoddam morans cimiterium, quod omni uespere ebrius pertransibat. Nocte quadam, dum domi redire debebat, in via cymiterium transiuit et cerebellum ibi reperit. Et commotus inquid: Quid iaces hic, miserum cerebellum ? Veni in domum meam et ego de cena mea prouidebo. Cui respondit cerebellum: Progredere, quoniam sequar te. Audiens ille turbatus est. Et ex timore sobrius factus est. Domum pergit et ualde tremens ad ignem sedit. Et iubet ostium confirmari. Dum igitur ad mensam sederet, precepit bibulus sub pena capitis, ut nullus intromitteretur cuiuscumque condicionis. Et ecce, subito adest ad ostium pulsans terribiliter pro hospite querens dicens se esse per eum inuitatum. Cum igitur cuncti ex terrore tacerent et unus eorum hospitem adesse negaret, dixit, qui pulsabat: Dicite hospiti, qui ueraciter adest, quod faciat aperire; alioquin per uiolenciam intrabo, quomodo possum.Audiens hospes iussit hostium aperire misericordie domini se committens. Et uiderunt, qui aderant, introire figuram hominis mortui miserabilis, cuius ossibus nerui et cutis cum cerebro tantum, consumptis carnibus, adhesit, omnibus terribilis ad uidendum. Qui se lotis manibus

prius non iussus ad mensam inter hospitem et hospitam locabat et nichil comedens neque bibens neque loquens omnes aspect terribili molestabat. Post hec surgens et hospiti ualefaciens dixit: De cena tua eciam inuitatus indigui. Si stulta et ebriosa uoce non michi illusisses, ad te adeo terribiliter minime uenissem. Sed nunc uale et ad cenam, quam tibi in loco, ubi me inuitasti, preparabo, post octo dies ista hora venire debes et uelis nolis uenire te oportet. Hoc dicens disparuit. Ad hanc autem uocem hospes cum tota parentela turbatus consilium euadendi a sapientibus quesiuit et nullum aliud inuenit, nisi quod disposita domo, reuera contritus et confessus ac sacra munitus communione tempore condicto dei iudicium exspectaret. Quod cum fecisset, hora condicta cum omnibus sibi attentibus ueniens subito per uentum ualidum raptus sine lesione ad amenissimum corporaliter ductus et pulcherrimum castrum, sed desertum uidit. Quod tamen ingressus mensam omni genere ciborum amenissimam inuenit. Post hec mortuus ille ut prius aduenit ipsumque graciose salutans ad mensam predictam sedere fecit, in angulo quodam latebroso sordidam habens mensam cum sordido mensali et panem nigerrimum et lumen miserabile. ad hanc mensam mortuus ille se locare cepit merens et tristis predictum intuens in mensa ornate sedentem. Quod communicatus uidens pre ammiracione et timore comedere non audebat. Demum mortuus surgens et ad aduenam dixit: Quare non queris aliquid a me ? Cui ille: Non audeo nec presumo pre tristicia, quia, quid michi futurum sit, penitus ignoro. Tamen, quod scitis aut quid mecum fieri debeat, cupio scire. Tunc ait mortuus: Ne timeas. Non peribis. Sed dispensacione dei pro tua correccione ista contigerunt. Si me secundum condicionem mortuorum non fatue inuitasses, hec tibi minime euenissent. Ut autem statum meum cognoscas: In ciuitate, vbi tu habitas quondam eram iudex. In diuino officio negligens et semper crapulose uixi. Sed quia iustissime iudicaui, ideo misericordiam sum consequtus. Et hec est pena mea: pro amore seculi castrum desertum possideo et pro crapula mensam pauperem et sordidam intueor. Modo domi saluus reuertere et peccata tua pys actibus dele. Quo dicto uenit uentus et illum ad locum, de quo assumptus fuerat reduxit. Ibique familiam suam lacrimantem inuenit. Que videns eum redeuntem et mirabiliter deformatum territi omnes fugiunt. Creuerunt autem ipsi vngwes in pedibus et manibus in modum aquilarum et facies eius nigra et horrida et yspida ex metu uidebatur, ita vt a suis minime nosceretur, quamuis per modiaum horam defuisset, que sibi tamen mille annos videbatur. Tandem ab eo reuocatis redierunt et rem per ordinem ab eo audientes deum collaudabant. Ipse autem in virum perfectum postea est mutatus et suam vitam bene meruit terminare.

この話の内容に立ち入る前に、伝承の問題を先に論じておく。これが 14 世紀中頃の、現存最古のドン・フアン伝説の原形となる中世説話である。

この次に古いのは、これより 100 年ほど下って、15 世紀の中頃に成立した、同じく旧ブレスラウ大学図書館所蔵の写本 I.F.514 に収録されていたものである[12]。この説話集の写本は、シレジア地方の別の都市ザガン（現在はポーランドの都市ジャガン）にあった律修参事会が持っていたものであった。この写本の第 447 葉裏面第 1 列にあるのが、やはりドン・フアン伝説の原形となる中世説話である。以下に全文を掲げるが、御覧の通り文言はほとんど 100 年前の最初の説話と変わらない。

和訳は省くが、注目すべきは、本文第 1 行目の下線部である。

De ebrio, qui defunctum invitavit.

<u>Legitur eciam in quodam libello, qui dicitur Annulus, parte II cap. XCI,</u> de quodam bibulo et ebrio, qui iuxta ciuitatem quandam morabatur et omni vespere cuitatem ebrius pertransiuit. Nocta quadam, cum domum ire vellet, in cimiterio quoddam cerebellum pede impegit et commotus ait: Quid hic iaces, miserum cerebellum ? Veni ad domum meam et ego tibi de cena prouidebo. Ecce, quod ebrietas fuit in ipso imeratrix flagicij. Respondit cerebellum: Progredere et ego sequar te. Audiens ille turbatur et ex timore sobrius factus domum pergit. Totus tremens et sedens iubet ostium obfirmari. Dum igitur ad mensam sederet, dixit familie, ne ullum intromitteret condicionis cuiuscumque. Et ecce, subito adest ostium pulsans quidam terribiliter pro hospite querens et inuitatum se ab eo commemorans. Dum igitur cuncti ex terrore tacerent et unus hospitem adesse negaret, dixit: Dicite hospiti, qui veraciter adest, quod faciat aperi. Alioquin per vim, ut possum, introibo. Audiens ille statim mandate ostium aperi, misericordie se diuine recommendans. Et viderunt, qui aderant, figuram introire mortui hominis miserabilis com ossibus carnibus consumptis terribilis ad videntum. Qui lotus se inter hospitem et hospitam collocauit nichil comedens ac loquens. Post hec surgens, hospiti valefaciens dixit: De cena tua inuitatus non indigui. Sed si stulta et ebriosa voce non illusisses michi, te adeo terribiliter non visitassem. Ideo valeas et ad cenam meam die octavo, vel nolis, venire te oportet in loco, ubi me invitasti. Hoc dicto disparuit. Ad hanc vocem hospes cum omnibus amicis suis turbatus consilium euadendi a sapientibus requirens non iuvenit, nisi ut disposita domo sua contritus,

[12] Klapper, Joseph: Exempla aus Handschriften des Mittelalters. 1911. Carl Winter, Heidelberg, Nr.46. S.36ff.

confessus ac sacra communione munitus in loco et tempore condicto domini iudicium expectaret. Quod cum fecisset, hora condicta cum omnibus suis ad cimiterium veniens subito per ventum validum raptus sine lesione ad locum amenissimum corporaliter ductus castrum pulcherrimum, sed desertum vidit. Quod cum ingressus esset, mensam omni genere ciborum ornatissimam invenit. Post hec mortuus ille advenit ut prius eum salutans, graciose ad predictam mensan sedere fecit, in angulo quodam sordidissimam ipse habens mensam cum sordidiori mensali et panem nigrum et lumen miserabile. Ad hanc mensam mortuus in humili sede tristis sedebat. Quod invitatus ille videns pre amaritudine et timore comedere non valebat. Deinde mortuus surgens dixit: Quare non queris a me ? Et ille: Non audeo pre tristicia, quia, quid michi futurum sit, penitus ignoro. Sed tamen, quis sis et quid mecum fieri debeat, scire cupio. Tunc mortuus: Non, inquit, timeas. Non enim peribis, sed pro correccione tua dei disposicione omnia hec contigerunt. Si me secundum condicionem mortuorum non invitasses, nichil horum tibi advenisset. Sed de statu meo sic fuit: In ciuitate, ubi habitas, quodam iudex eram, in diuino officio negligens et semper in crapula vixi. Sed quia misericors fui, ideo misericordiam consecutus sum. Et hec est pena mea, quam vidisti: pro turba desertum possideo; pro crapula mensam pauperem et sordidam intueor. Modo ad domum tuam reuertere et peccata tua pijs operibus dele. Quo dicto venit ventus, qui eum ad locum, quo assumptus fuerat, reuexit. Ibique adhuc familiam suam lacrimantem et alios amicos, quos ibi reliquerat, invenit. Qui videntes reductum mirabiliter et miserabiliter deformatum territi fugerunt. Creuerant enim ei vngwes in manibus et pedibus in modum aquilarum et cutis eius nigra et horrida ex metu reddebatur, ita ut a suis minime nosceretur. Tandem ab eo revocati veniunt et ab eo rem per ordinem audientes dominum collaudabant. Ipse autem in virum perfectum postea est mutatus.

この第二の写本に集められている説話はほとんどが別の説話集、『ゲスタ・ロマノールム』とかカエサリウス・フォン・ハイステルバハ『ディアログス・ミラクロールム』とかに収録のものと重なっていて、あちこちから集めてこの説話集を新たに編纂したことが分かっている。

上の引用の第 1 行目に「これも Annulus と呼ばれる書物の第 2 部第 91 章にある話だが」とあるように、この写本ではこうして出典が明記されていることがある。さて、その明記された出典の中で、上の引用にある Annulus という説話集は、浩瀚なものであったようだが、残念なことに今日まで原典が発見されていない。

私たちのドン・フアン伝説の原形となる説話は、この謎の説話集 Annulus に記載されて

いたものだというのである。この Annulus がどのようなものであったか、少しだけ推測する手掛かりが残されている。

当時のブレスラウ大学図書館所蔵の他の説話集にも、Annulus からの転載であると書かれた説話が多くある。（これらの研究の重要性をクラッパーが早くから提起しているが、研究が進んでいるようには見えない。これが私の不勉強のせいである事を祈る）残念なことに私は写本の写真版すら見ることができず、自分では確認できないが、クラッパーがざっとあらすじを紹介している範囲で判断すると、Annulus からはどうも、「死者の蘇り」というテーマに関する説話が多く取られる傾向があるようだ。

そのうちの一つをクラッパーが校訂してくれている[13]。

＜墓場の死者たちに引き留められた聖職者＞

これも『アヌルス』の 122 章にある話である。ある聖職者がしばしば墓場を通り抜けたが、死者たちのために全くお祈りをしなかった。ある日また墓場を通り抜けていると、ある死者が墓から手を伸ばし、この聖職者の足を掴んだ。聖職者はとても怖がって叫び声をあげ、近隣の人々がやってきたが、聖職者を放してやることができなかった。一日たって司教が司祭と共にやって来ると、なぜその聖職者が引き留められているのか明らかにしてくださいと主に願った。そして司教は死者に向かい、なぜそのように聖職者を引き留めるのかただした。死者は、神のみ心によって行われたことだと答えた。そして、その聖職者はしばしば我々の上を通り抜けるのに、我々のために全くお祈りをせず、我々のために捧げられた施し物を一日中食べている、と言った。そこでこの聖職者は、司教の命令で、今後は墓場を通り抜けるときに必ず死者たちのためにお祈りをすることを約束した。こう約束すると、直ちに放してもらえた。

De sacerdote, quem mortui in cimeterio detinuerunt.

Legitur eciam in annulo cap. CXXII. Quidam sacerdos frequenter transibat per cimiterium et nichil pro mortuis orabat. Cum autem quadam die transiret, quidam morutuus extendit manum de tumulo et rapuit eum per pedem.At ille valde timens clamauit et surrexerunt vicini et non potuerunt eum liberare. Facto die venit episcopus cum clero et rogauerunt dominum, ut manifestaret, quare sacerdos detineretur. Et adiurat episcopus mortuum, quare sic sacerdotem detineret. Qui dixit voluntate diuina esse gestum. Et vlterius ait: Sacerdos iste frequenter transit super nos et nichil orat pro nobis et tota die comedit elemosinas pro nobis oblatas.

[13] Klapper, Joseph: Exempla. a.a.o. Nr.37, S.32f.

Tunc sacerdos mandato episcopi promisit, quod de cetero non transiret per cimiterium, nisi oraret pro mortuis. Quod cum fecisset, statim liberatus.

「死の客」der tote Gast の物語パターンから一歩進んで、死者が積極的に起き上がって生者のありように介入してくるこの「害をなす死者」der schädigende Tote という物語パターンが、Annulus から採られた説話には多く見られるという。

この物語パターンは、17 世紀になって東ヨーロッパの記録に残されるようになった「ヴァンパイア」 vampire の伝説と構造上極めて近い関係にあると言える[14]。なんとドン・フアン伝説の源流は、ヴァンパイア伝説の近隣にあった様子なのである。こうなると、この関係を解く鍵を握る Annulus を是非調べてみたいものだと思うが、失われたのが残念でならない。

ブラム・ストーカーの卓抜な小説化と、また往年の大俳優ベラ・ルゴシ演ずるところのドラキュラ像、あの悩み苦しむヴァンパイア像を思い起こせば、ドン・フアン像との関連にはたと思い至ることがないではない。たいそう魅力的なテーマではあるが、これを扱うのは別の機会に譲ろう。

少なくともここで確認しておきたいのは、ドン・フアン伝説の原型にあったのは、生の世界と死の世界の鋭い対立、異界との命がけの交通であって、罰の不在に怯える性愛地獄ではなかったということである。

IV.

1615 年の秋、南ドイツ・バイエルンの都市インゴルシュタットにあったイエズス会神学校の生徒たちが、民衆教化のためにいわゆる「イエズス会演劇」を上演した。これが、ドン・フアン伝説の一変種、レオンティス伝説の最古の史料である。台本そのものは失われたが、その内容の概略について記録が残っている。[15]

上演内容の概略：レオンティウス伯爵についての物語。同伯爵はマキャベリに惑わされ、恐るべき最期を迎えた。この物語から教訓とすべきは、今の時代に漂っている反キリスト教的な政治主義がいかに有害かということである。

上演は 1615 年インゴルシュタットにて

Summarischer Innhalt der Action. Von Leontio einem Graffen, welcher durch

[14] Klapper, Joseph: Quellen der Sage vom Toten Gast, in: Festschrift zur Jahrhundertfeier der Universität Breslau. Mitteilungen der schlesischen Gesellschaft für Volkskunde XIII (1911) S.202-231, hier S.208.
[15] Bolte, a.a.O.

Machiauellum verführt, ein erscreckliches End genommen. Darauss auzunemen, wie schädlich seye der jetzigen Zeit schwebender, vnchristlicher Politicismus.
Gehalten zu Ingolstadt im Jar Christi M. DC. XV.

マキャベリが悪役として登場し、すべての悲劇の原因を作るのである。少なくともインゴルシュタットのイエズス会においては、マキャベリは思想的・政治的にそれほど重要な敵と位置付けられていたようである。
マキャベリがレオンティウス伯爵に悪影響を及ぼし、ようやくここにドン・フアン伝説の変種であるレオンティウス伝説が始まる。

マキャベリが生涯にそのやり方で教会と全ての善から背かせた、その他の何千人という哀れで無分別な人々の中に、レオンティウス伯爵という人物がいたが、マキャベリがこの伯爵の宮廷にやって来ると、彼の秘密の教えをこの伯爵に何度も吹き込み、第一にその著作の力によって、さまざまな悪徳へと向かわせたのであった。領内の住民に対する残酷な態度や、不信心や不純な行為などといったことである。

Vnder vil tausend andern Armen vnd Aberwitzigen, die er zu seiner Lebzeit also vnd auff dise Weiss von der Kirchen vund allem guten abgezogen, ist auch gewesen ein Graff [Leontius], an dessen Hof er ankommen, offtermalen jhme sein verdeckte Lehr eingespühen vnd erstlich nach vermög seiner Schrifften auff alle Laster gebracht: als Grausamkeit gegen seinen Burgern, Vnkeuschheit vund Vnlauterkeit vund dergleichen.

こういう感化を受けた結果、この善良な伯爵は、神を恐れぬ教えに従い、一切何も信じなくなってしまった。天国も地獄も、神も罪びとに下される永遠の罰も。しかし伯爵のこのような悪しき考えを、神は長く放置されることはなかった。ある時伯爵は客を迎え、客と共に墓地を通って家に向かっていたときに、路上で髑髏を見つけると、この髑髏に対して瀆神の言葉で嘲笑しつつ話しかけ、足蹴にして、お前の魂は何処へ行っただの、死んだ後にはもっと別のことが起こると期待していたのじゃないかなどと問いかけ、あまつさえ自分の家で行う宴会に来るように言い、その機会に、今尋ねたようなことを話して聞かせてくれとまで言った。

Auss diser Schul dann der gute Graff also proficiert, dass er nach solcher gottlosen Lehr letztlich gar nichts mehr glaubt, weder Himmel noch Höll, weder Gott noch ewige Straffen der Verdambten, welche böse Meinung jhme Gott nicht lang hat lassen gelten, sonder da er wolte auff ein Zeit ein Gasterey halten vnd der Graff

vor derselben vber den Frewdhof heimb gieng, traff er auff dem Weg ein Todtenkopf an, disen redt er an Gottslästerlicher weiss mit Spottworten, fragt vnd stost jhn mit dem Fuss, wo sein Seel wer hinkommen vund ob nach disem Leben etwas anders zu gewarten wer; darauff heist er jhne auch zu seiner Malzeit kommen, bey der er jhme solte erzelen, was dergleichen Fragen anbelangt.

さて伯爵が帰宅し、客人と共に食卓に付き、全てのこと、特に善なることを笑いものにして楽しんでいると、入り口のドアのところに化け物のように巨大な男が一人やって来て、ドアを開け、中に入れるように求めた。このことが伯爵に取り次がれると、伯爵は恐れはじめ、全てのドアと入り口を固く閉ざすよう命じた。大男はさらにドアを叩き続けるので、使用人が再びこのことを取り次ぐと、伯爵は心底恐怖して髪を逆立て、先ほどと同じように、全てのドアを固く閉ざすように命じた。しかし新たに招待されてきたこの客は、中からドアを開ける気がないと見ると、ドアに手をあてたが、そうすると直ちに全ての鍵と錠が細い糸のようにばらばらにちぎれてしまった。こうして入り口を開き、自由に出入りできるようになると、大男は家の中に入り、階段を上り、食卓まで入り込んできて、伯爵の隣に席を取り、ぱくぱくと食べ始めた。他の客にしてみれば、このような見知らぬ客がいると窮屈な思いがするので、一人また一人と去ってゆき、マキャベリもまたこの宴会仲間が彼に何かを与えてくれるまで待っていたりはしなかった。哀れな伯爵は、大変な苦境の中にあるのに、友人たち全員から見捨てられたことを知ると、自分も逃げ出そうとしたが、叶わなかった。

Wie er nun heimkam, mit seinen Herren zu Tisch sass, aller lustig vnd guter ding war, kombt an die Thür ein grosser vngehewrer Mann, begert, man solt jhm auffthun vund hinein lassen. Aber wie solches dem Graffen angezeigt worden, fieng jhm an grausen, verschaffte alle Thür vnd Thor fleissig zuuersperren. Diser klopfft eins klopffen, die Diener zeigens wider an; da fiengen erst recht dem Graffen die Har gen Berg zustehn, befilcht wie vor alles fleissig zuuersperren. Aber der new geladne Gast, wie er sicht, das man jhm nit auff wolte thun, fieng er an die Händ an die Thür zulegen, vnd alssbald seind alle Schlöser vnd Rigel wie die kleine Faden von einander gerissen worden. Nach dem er jhm nun also Weg vund freyen Bass gemacht, trat er hinauff vber die Stiegen vnd hinein für die Tafel setzt sich dem Graffen an die Seyten, fieng an dapffer zu essen. Aber den andern Gästen vnd Herren fieng an zu eng weren bey solchem vnbekanten Gast, schraufften sich einer nach dem andern daruon, wie dann auch Machiauellus nit erwardt, biss jhm diser Zechgesell etwas fürlegt. Als der ellende Graff gesehen hat, dass er vberal von seinen Freunden in der höchsten Not wäre verlassen, wolt er auch fliehen; aber es

ist jhm nit also gerathen.

このあつかましい客は伯爵を持ち上げると、立ち上がって言った。『お前が望んだこと、つまり、この惨めな生の後に永遠の生が待っていることを、お前にみせてやれという神の命に従って、私はここにやってきた。私はお前の祖先ゲロンティウスであり、呪われて地獄の苦しみの中にあるが、お前もそこに連れ去るように言われているのだ。』こう言うと、この呪われた霊は伯爵の腰を掴み、壁に叩きつけ、これらの証拠に伯爵の脳を壁に引っ掛けると、伯爵を地獄に連れ去った。

Der vnuerschambte Gast hebt jhn, stund auff vund sagt: 'Nun da bin ich kommen auss Göttlichem Beuelch, dir anzuzeigen, was du begert, das nemblich nach disem ellenden Leben noch ein ewiges zugewarten. Ich bin dein Anherr [Gerontius] vnd verdambt in die Höllische Pein, zu welcher ich dich mit mir solte weck reissen.' Als er dises geredt, nam der verdambte Geist den Grafen bey der Mitten vnd schlug jhn an die Wand, dass das Hirn zum Warzeichen daran hieng, vnd führt jhn mit sich in die Höll.

まさか「イエズス会演劇」において面白おかしい性愛絵巻を繰り広げるわけにもいかないという事情もあっただろうが、中世説話から持ってきた「死の客」伝説を翻案・発展させ、何としても成敗したい思想的・政治的敵、戦うべき相手が当時のイエズス会士たちにはいたのである。マキャベリの名に代表される、「理想無き現実的政治主義」は、近世のヨーロッパ演劇で大きなテーマの一つであったという。マキャベリ自身が、何よりも劇作家として名をなした人であったから、演劇の世界に取り入れやすかったということでもあろうか。

ここで特に注意しておかねばならないのは、ドン・フアン伝説の源流が、政治とも密接な関係があったということが、このレオンティウス伝説という変種からうかがえることであろう。

実際に近代文学におけるドン・フアン伝説を、単なる現世の享楽を肯定する色事師の話ではなく、反封建・反教会を体現した主人公による、市民革命を予告する物語とみる解釈は、特にモリエールやモーツァルト／ダ・ポンテの作品について、研究史上一つの定説とはなっている[16]。ドン・フアン伝説に基づく膨大な近代文学の作品のすべてをこの政治的解釈でくくるわけにはいかないだろうが、一部の作品には大いに可能な観点であろうと思う。

そして政治的転換期、激動の時代には、荒々しい変革のエネルギーが文化的にも現れ、

[16] Molière: Dom Juan, hrsg. v. Hartmut Stenzel a.a.O, S.193ff.
Mayer, Hans: Doktor Faust und Don Juan, Frankfurt a.M. 1979.

ドン・フアンのような、旧来の道徳や習慣を踏み破る一見放縦な、ピカレスクな主人公が活躍するという議論も、以前は文学研究・文学評論において盛んであったが、今はどうであろうか。マキャベリをはじめとするレオンティウス一味の人間的小ささを見ると、とてもそんな議論に耐えるような作品でもないだろうか。

必ずしも直接関係があるわけではないが、後年 19 世紀になってから、メアリー・シェリーが名作『フランケンシュタイン』の舞台としたのが、ここインゴルシュタットの大学であった。あの化け物を作り出して翻弄され、人生を棒に振る、野心に満ちた駆け出しの科学者フランケンシュタインには、レオンティウスの影が見えなくもない。こちらの場合は、虚栄心ばかり大きい卑小な人物であることが、両者の比較を議論する妨げにならないだろう。

V.

ドン・フアン伝説の変種、絞首台伝説の最古の例は、16 世紀初め頃に旧ドイツのダンツィヒ（現在はポーランドのグダンスク）で活躍したドミニコ会の司祭・歴史家のジモン・グルーナウ『プロイセン年代記』に、1526 年の出来事として記載されている[17]。

＜極めて正しい神の裁きについて、そしてまたその裁きを嘲笑してはならぬこと＞

この頃、また次のようなことが起こった。とてもすばしこい泥棒が捕らえられたのだが、この泥棒は、どんなに用心していても馬を盗み出すのであった。この泥棒が、次のような次第で捕まった。ある村の司祭が、良い馬を持っていたのだが、この馬をアンゲルボルクの漁師に売ったが、無防備なままであった。この司祭からこの泥棒はその馬を盗んでやろうとして、様子をうかがっていた。そしてこの司祭がとても聡明であることが分かった。この司祭は賢く、注意深すぎる。そこで泥棒は思いついて、とても貧しい乞食の服を着ると、杖を突いて歩き、司祭が馬に乗って町に出かけ、沢山の人と会っている時に、この泥棒は障害のある貧しい姿で施しを受け、うまくいくと、先に行き、野原の真ん中に立っている、泉のほとりの木の下に座り、両方の杖を木の上に投げ上げた。それからほどなくしてあの司祭が一人でほろ酔い機嫌で馬に乗って通りかかり、木の下に乞食の格好をした泥棒がいるのを見ると、こう言って忠告した。兄弟、もう夜になるし、狼も沢山いるから、あんたも立ち上がって帰った方が良いですよ。乞食の格好をした泥棒は激しく泣き始め、こう答えた。司祭様、私にどこへ行けとおっしゃいます。さっきまで悪童どもがいて、私の杖を木の上に投げ上げ

[17] Grunau, Simon: Chronika und beschreibung allerlüstichenn, nützlichstenn und waren historien des namkundigenn lands zu Prewssen. Hrsg. von Perlbach, Philippi, Wagner, 1875ff., S.405-408.

てしまったんです。司祭は同情すると、馬から降り、馬を抑えていてくれと泥棒に手綱を渡し、ロンドン製の上等な乗馬服を脱ぐと、木に登って杖を取ろうとした。この時に泥棒は馬に飛び乗り、森の中に走り込み、乞食の服を脱ぎ捨てると、司祭の乗馬服を着、そして司祭の方は徒歩で家に戻った。途中で司祭に出会った者達が、何故徒歩で歩いているのかと尋ねると、事の次第を話した。こういうことが起こったので、司直があちこちこの泥棒を探し回り、捕らえると、絞首刑にして罪を償わせた。この事件は国中に知れ渡り、この絞首台の前を通るものはみな、このすばしこい泥棒の悪党ぶりを笑い話にしたものだった。

Von eim seer rechten gerichte gottes, und wie man die gerichte nit spotten soll.

In diser zeit unnd disz geschach, wie ein seer behennder dieb gefanngen wart, unnd war der, der eim ein pferdt stal, er were wie fursichtig er wolte. Diser also war begrifen. Es war ein dorffpfarrer, der ein schones pferdt hette, wolchs er dem vischmeister auff Angerborg verkaufft hette, sonder nit gewert. Disem priester der dieb das pferdt hett gewettet zue stelen unnd darnach auffzuhorenn. Und der dieb im viel weisenn erdachte, sonder der priester war im zu listig und vorsichtig. Der dieb im ein solchs erdacht, und legte an cleider eines seer armen bettlers unnd gienng auff krucken, unnd als der priester in die stat war gerittenn, unnd da er mit vielen mennern sasz, dieser dieb in gestalt so lam und arm nam das almusz, unnd da es im gefiel, er gienng vorausz unnd satzte sich under einen bornnenbaum, der auf freyem velde stundt, unnd warff bede krucken oben auff den baum. Nit gar lanng darnach quam der priester geritten alleine unnd wol getruncken unnd findet denn dieb in gestalt eines bettlers unnder dem baum unnd reth in ahn, sprechennde: bruder ,es gehet nach der nacht, unnd der wolffe sint viel, ihr must euch aufmachen unnd zu leitten gehen. Der dieb in gestalt des bettlers hub an schelklich zu weynnen und sprach: wyrdiger herr, wa soll ich hin ?　es waren itzunt buben hie, unnd die mir meine krucken auff den baum wurffen. Der priester sich erbarmte unnd stig abe und gibt dem diebe den zaum vom pferde, es zu haltenn, unnd zeuch ein gutten Lindischen reittrock ausz unnd steigt auff den baum unnd wolt die krucken herabgewynnen. In dem der bettler springt auf das pferdt unnd rennet zu waldt ein unnd die bettlercleider weck warff unnd zog des pfarrers rock an, und der pfarrer gienng zu fusz heim. Die im begegneten, in fragten, wie er zu fusz so giennge, unnd er es in sagte. Disz quam ausz, unnd der pfleger überal bestalte auf den dieb, und man in erwuschte und thet im sein recht am galgen. Disz war lanndtkundig, unnd wen man vor das gericht über ritt, man der behennden

schalckheit lachte.

そしてある時、一人の貴族が他の者と一緒にこの前を通りかかったが、彼はとりわけ悪ふざけが好きな人間であった。大声でこの裁かれた泥棒に呼び掛けて、言った。おお、すばしこく、賢い泥棒君。定めし君は多くのことを知っているに違いないから、次の木曜日にうちに招待するので、ニンニクでも食べに来ませんか、君からすばしこさについて教えてもらおうと思います、などなど。そしてさらに言った、仲間も連れていらっしゃい。そして一緒にいた者達もげらげら笑い、あれこれ軽口をたたき、それから帰り道ずっと、すばしこい泥棒でも最期をどんなざまで迎えるかという話で大笑いをした。木曜日が来、この貴族は朝おそくまで横になって寝ており、彼の妻はこの招待について何も知らなかったが、時計が 9 時を指すと、あのままの格好で絞首台の鎖も付けたまま泥棒たちがやって来て、妻にあいさつしたが、泥棒たちはこの招待でこの貴族にとても感謝している様子だった。絞首刑になった者達はこう言った、奥さん、驚かないでください、私たちはあなたのご主人にこの前の月曜日招待を受けたので、ご主人のお気持ちに従って今日やってきた次第です。妻が答えて、うちの主人もそんなこと本気で申したのではないと思います、あなた方を招待したのも、酔った上での約束だったのでしょう、と言った。絞首刑になった者達は、ご主人ははっきり口に出して言ったので、私たちはそれに従ったのですから、ご主人を起こし、私たちがもうここに来ていると伝えてください、と言った。妻は主人の寝室に入っていくと、心から泣きながら言った。あなたの馬鹿さと悪ふざけが何時かひどいことになるのではないかとずっと心配していたのです、さあ起き上がって、あなたの客であるあの絞首刑になった者達をお迎えなさい。それから彼に、向こうの部屋でのやり取りを全て話して聞かせた。この貴族は、神が報いを与えたことに気づき、起き上がると、客達を迎え、家にあるものを彼らの前に並べさせたが、彼らがそれに触れると、全て消えてしまうのだった。

Unnd es quam, wie auff ein zeit ein edelman mit andern vorüberrieth, unnd er zumal spottisch war. In voller weise er disen gerichten dieb anschrey sprechennde: o du behennder unnd cluger dieb, du must werlich viel wissen, ich bitt dich auf den nechsten dornnstag zu gaste zu eim knobloch, damit ich auch von dir moge behenndigkeit lernen; unnd solcher wortte me. Unnd sprach: bringe deine compans mitte. Und disz wart wol belachet von den anndern, die mit ihm rieten; der eine disz, der ander das sagte, unnd war der ganntze weg nu rein gelechter von den historien, wie diebe im letsten gesatzt und gestorben weren. Der dornnstag quam, unnd dieser edelman im morgen lanng lag unnd sc hlieff; seine fraw von diser gastladung nichts wuste; und umb neune am saiger die diebe quamen, ein

igclicher mit seiner gestalt unnd keten vom galgen unnd die fraw grüsseten; sonnder wie freuntlich sie in dannckte, ist abzunemen. Und die gehangenen sprachen: liebe fraw, erschrecket nit, uns hatt eur juncker am verganngen montag zue gast gebetten, auff ein solches wir seint komen nach seinem begehr. Die fraw sprach: es ist im werlich kein Ernst gewesen, unnd er euch zu gast gebetten hat, sonder in seiner trunckenheit vielleicht er ein ehrwort hat gethann. Die gehanngnen sprachen, er hat es mit dem munde gereth, unnd darnach wir unns halten; weckt in auf unnd sagt es im an, das wir hie sein. Die fraw gienng zum junckern in die camer unnd mit hertzlichen weynen sy sprach: ich es lannge wol besorgt habe, unnd eur folheit und spotterey wurde einmal geschendet werden; stehet auff unnd entpfahet eur geste, die gehanngnen. Unnd im alles verzelte, was da geredt war in der stube. Der edelman mereckte, wie in got heims uchte, er stund auf unnd seine geste entpfienng unnd liesz in vorsetzen, was da war, unnd alles, was er in vorlegte, unnd sie es anrurten, es verschwant.

食事の間、この貴族は、絞首刑になったあの馬泥棒に話しかけた。君の馬泥棒の行いの中でも、君のすばしこさは本当に笑わせてもらったよ。

泥棒は答えていった。私にとってはもう笑い事じゃありませんからね、あなたが笑うと、ますます私は悲しくなります。

貴族：それにしても驚きなのは、君はそんな野卑な見かけなのに、それほどの狡猾さが君の中にあるということだよ。

馬泥棒：神の掟を破るのに向いていると悪魔に見られますとね、巧みにそういうことができるようになるんです。本当のことを言いますとね、神の掟をよく守る「光の子」たちより、世俗の垢にまみれた人間の方がこういう仕事をさせるとずっと上手なんですよ。

貴族：煉獄にはどんな意味があるのだろうか。多くの人が疑っている、というのも、聖書にははっきり書いていないのに、あるに違いないというから。

馬泥棒：聖書にははっきり書かれているけれども、頭のいい人々は虚栄心が強いので理解したくないんですよ。自分の治める者を罰するのは、堕落させるためじゃなくて善導するためで、そのための場を持っていない主人なんていませんから。

貴族：そういうのは変わった裁きだと思うな。

馬泥棒：風呂屋のようなものですよ、一人出る奴がいても、百人入ってくる奴がいる。

このようにたくさんの質問を貴族は投げかけたが、食事の時間は終わり、絞首刑になった者達は心から貴族に礼を言うと、言った。今度は私たちがあなたのことを、神の秘密のさばきに従い、あの木の台へ、私たちが私たち自身の悪事のせいで世間から命を絶たれたあの木の台へご招待したいと思います、これから 4 週間後です。そう言

って帰っていった。

Unnder dem essen der edelman sprach zum gerichten pferdtdieb: und es wirt deiner behendigkeit viell gelachet in deinem handel mit stelen der pferde. Er sprach: es ist mir aber itzunt nit lecherlich; unnd ir lachet, mir mein betriebnus meret. Der edelman: unnd es ein wunder war, sint dem du ein grober man werest anzusehen, unnd solche hinderlist in dir war. Er sprach: Unnd so der sathanas sihet, und ein mensch sich schicket auff gottes gebot zu brechen, er es vermag, listlich ein solchen zu machen, sint dem mal unnd disz die warheit gesagt hat, wie die kinder diser welt witziger sein in iren geschefften, dann die kinder des liechtes. Der edelman: wie hat es ein synn umbs fegf eur, von dem vil zweifeln, sit dem mal man es nit findet clerlich in der heiligen schrifft, unnd es sein solte. Er sprach: es ist wol clerlich gnug in der schrifft, aber spitzsinnige leuth, der synn auf eitel ehre ist, es nit wollen versteen, sintdem kein herr ist, der nit eine stelle hat, da er die seinen nit zum verterbnus,sonnder zur besserung strafft. Der edelman: es musz mir ein seltzams gericht sein umb disz. Er sprach: es ist wie ein batstube, einer ausz, hundert ein. Unnd solcher mancherley fragen me der edelman tet, und die stund mit dem essen war umb, und die gehangnen im dannckten vor guten willen unnd sprachen: so bitten wir euch ausz dem heimlichen gerichte gottes zu gaste an das holtz, da wir umb unser missethat willen von der welt sein getottet worden, unnd da ir mit unns solt aufnemen das gerichte zeitlicher schmaheit, und disz sol sein heut uber vier wochen; und schiden so von im.

貴族はこのことに驚いたが、自分は誰からも何か取ったわけではないのだからと自らを慰め、多くの人とこのことについて話したが、ある者はこう言い、別の者はああ言い、結局分かったのは、数えてみるとその日は万聖節に当たるから、お祝いのために裁きは行われないだろう、ということだった。貴族はこのことに心を動かされたが、聞き流し、しかしずっと家に閉じこもり、毎日客を証人として自分の周りに来てもらった。何か起こった時に、自分の無実を訴えるためだった。さて当時はプロイセンに盗賊がいた、路上の追剝でグレゴール・マターンのような連中である。盗賊の一人が、ライン地方の管理長官エベルハルドゥス・フォン・エムデン司教を刺殺したため、部下の管理官が、この盗賊またはその仲間を襲撃し、いかなる裁判手続きもなく処刑する許可を得ていた。神の御心で、盗賊にして殺害犯の所在が、この管理官に報告される時が来ると、一同は出発し、盗賊を発見し、後を追った。この時にこの貴族も追跡に参加したが、厄介な事情を抱えて帰国していたので、自領から直接出発し、この戦いに加わった。この貴族の馬も衣装も盗賊のものであるように思われたので、一同が

この貴族にとびかかることになったのが丁度万聖節の日で、この貴族は応戦し、別の若い貴族を殺してしまったが、それが上の監督官の友人であった。そこで一同はこの貴族を捕らえると、ラウエンボルクの町に連行した。そして殺された若い貴族の遺体を荼毘に付することを、あるリトアニア人に金を与えて委託し、もう何回も話題にした貴族の方は縄をかけて裁きの場に引き立てた。この貴族は神の秘密の裁きの話をし、それが今回の死者によって自分に現れたのだと、大いに語った。他の者達は、この貴族がただ弁明のためにそういうことを言ったり叫んだりしているだけだから、他の人々がその主張を受け入れる前に、処刑してしまえという意見であり、絞首刑になった者達が彼に予言した通り、彼もあの客たちのところへ突き落されたのであった。

Der edelman vor disem erschrack, idoch er sich selber trostet, unnd er nimant was genomen hette, und also mit vielen in diser sache redete; der eine disz, der annder das sagte, unnd man fanth, wie der benumpte tag war der tag aller lieben heiligen, in wolchem umb loblichheit der feyr man nit richtet. Von diesem er wart bewegt unnd es in den winth schlug, idoch er plieb daheim unnd alle tag geste umb gezeugnusz willen bey im hette, damit, so etwas geschehe, er sich mocht erbitten seiner unschult, wann es weren itzund in Preussen reutter, das sein strassennreuber, alsz Gregor Mattern unnd dergleichen. So war einer under in von den reuttern, der erstochen hette b. Eberhardum von Empten, hauszcompter auff dem Rein, darumb der compter het urlaub, wa er in ader seine compans anqueme, man solt in ir recht thun ohne alle audiencia. Unnd es quam, wie got wolt, unnd dem compter wart verspehet, wie der reutter unnd morder vorhannden were, unnd sich aufmachten und in ansichtig wurden unnd im nachrenten. In wolchem rennen diser edelman auch quam gerannt, wen umb traurigkeit willen er von heim geritten war, und quam in disz trupel; unnd alsz in dauchte, pferdt unnd cleidung wer des reuters, sie in ansprenngten im tage aller heiligen, unnd er sich worete und erstach einen jungen edelman, des compters freundt. Umb wolches willen sie den fiengen und in nu vor die stat Lauenborg furtenn; unnd damit der totte da wurd gerochenn, mann gab gelt eim Littaw, und er den vilmal genanten edelman mit eim strang auffurtte. Unnd der edelman da sagt von gottes heimlich gerichtenn, unnd wie es offenbart im were worden von solchem tote; unnd der wortte vil. Unnd die anndern meinten, er wolte es nur zu einer auszrede sagen unnd schrien, man solt nur abstossen, ehe dann sich seiner ander leuth annemen, unnd man hatt in da zu seinen gesten gestossen, wie es im war angesagt von in.

グルーナウの歴史記述は党派性が強すぎ、後世の歴史家から信用できないと言って評判

が悪い[18]。近世プロイセン史に昏い私には、末尾に至って突然具体性を帯びるこの物語の史料的価値を批判的に評価することができない。何故そこでその具体名（人名にせよ地名にせよ）を出す必要があったのか、前近代の記録には困惑させられることがままあるが、これもその類である。

しかし物語としての面白さ、語り口の巧みさは争いようもない。死者の罪も面白く詳細に描写されるし、死者の来訪に衝撃を受けて、旦那の日々の態度の悪さに腹を立てる奥方の様子も可笑しいし、訪ねてきた死者と、さながら『アッカーマン・アウス・ベーメン』を思い出させるような神学的対話を交わすとぼけた様子も印象的である。何という無駄に長い楽しさであろうか。

ドン・フアン伝説は、ここでは当時の具体的な社会問題・政治問題と密接に結びつき、現実的なガバナンスや法解釈の問題と重なっている。古いラテン語史料に見られるような、円満な「罪と罰と改心と救い」の倫理的説話でもなく、レオンティス伝説におけるような、思想的・政治的逸脱（＝罪）と匡正（＝罰）の問題でもなく、具体的な政治的・法律的係争案件の現実的解決の問題である。

グルーナウの記述によって物語の後半、我々は一気に 16 世紀プロイセン、ポメラニアあたりの生々しい政争に巻き込まれる。「盗賊」などという悪罵に惑わされてはならないところであろう。してみると、ここで「絞首台」は、メルヘンの背景にある、恐ろしい書割ではない。リアルな現実描写の一部である。

これは歴史学の原始時代、年代記が歴史になろうと背伸びをしているような姿に見える。年代記が歴史となるために、事件の客観的な描写と並んで、何らかの「評価」を下さねばならない。その評価の基準が普遍性を持つための苦労が、今日まで続いている。グルーナウでは、その苦労と努力の一端として、ドン・フアン伝説の原型が利用されている。「死の客」を歴史記述の骨格作りに使おうなどとは、現代の進歩した学問水準からすれば、まともに相手にする必要もない愚かな所業だと思われるだろうか。

ここでグルーナウが見せているのは、法律や政治上の係争案件を議論して、論駁と説得と関係者間の合意を実現するために、数学的厳密さとは別のところに立てられた実用的論理性の技法、古典レトリックに言う「省略三段論法（エンテュメーマ）」の初歩的技術の一つで、誰でも知る説話や神話や物語の挿話を根拠や例示に使用する、という方法であり、これをグルーナウは学校で教わった通り真面目に踏襲しているものと思われる。（無駄に長いのはグルーナウの個性であろうが）

だから超自然の力や迷信や怪談を信じた愚かな知性と思想に立脚しているとか、技法が前時代的で原始的・幼稚だからグルーナウの記述方法に今日的説得力がないのではない。ドン・フアン伝説に対して現代人がこのような関心を持たなくなったことが、グルーナウ

[18] Max Töppen: Geschichte der Preussischen Historiographie von P. v. Dusburg bis auf K. Schütz, oder: Nachweisung und Kritik der gedruckten und ungedruckten Chroniken zur Geschichte Preußens unter der Herrschaft des deutschen Ordens. Hertz, Berlin 1853, S.122-201.

の記述が理解しがたい原因なのである。

何度も言うが、現代においてドン・フアン伝説には、放縦な性愛で滅びる男のイメージしか求められていないからである。

VI.

以上、ペツォルトが明らかにした4つの変種に沿って、史料紹介もかねて長い引用を行いながら、ドン・フアン伝説の変容を概観した。

こういう伝承史をたどると、前近代の素朴で幼稚な物語が、近代の要求にこたえて複雑に発展していくのが普通であるという先入観があるのだが、ドン・フアン伝説の歴史をたどって見えてくるのは、実際には全く逆の変容過程であった。

むしろ近代のドン・フアン作品は、もともとあったドン・フアン伝説の様々な可能性の広がりを一路縮退させ、罪の内実の描写ばかりに勢力を注いでいくようになるのであった。言葉は限りなく増えているが、構造自体はこれ以上ないほどやせ細ってしまったのである。

罪があって罰・償いがある、その単純な構造を前提として、元々あったドン・フアン伝説の特殊性はどこにあるかと言えば、死者の世界と生者の世界の緊張関係、その対立と共存との関係において罪と罰が物語になっている、ということである。近代のドン・フアン作品にあるように、罪を犯したから死者の世界に送られるのではなく、元々死の世界は罰や償いそのものとイコールではない。罰とは哀れな死後の姿の方にあった。

ドン・フアン伝説に元々あった罪とは、死者の世界と生者の世界の対立と共存の秩序を犯したことである。死に対する侮辱は、結局生に対する侮辱と同じだからである。そしてそれは、生と死の両方を統べ給う神に逆らうこと――自然の大きな秩序を乱すことだからである。

原型の中世説話が、その基本構造を、素朴ではあるが一つの完成した全体として、円満な罪と償いの物語りにしている。罰は死そのものにではなく、哀れな死後の様子にある。死を馬鹿にし、生を馬鹿にした報いである。死後の世界でああはなりたくない、だから生において正しさと徳を全うするように改心する。

死者を怒らせる、死と生への冒瀆をどのようなものととらえるか、それがレオンティス伝説と絞首台伝説の違いとなる。正しくない世界観に染まるか、絞首台に象徴される現実の法秩序に疑問を持つか。

しかし根本はそんなに違わない。神学的議論に比重がかかっていようが、それをもとにした現実のガバナンスの方に関心があろうが、生と死の世界を支える根本的原理を尊重するかどうかに、罰を受けるかどうかがかかっている、という認識は変わらない。

そしてもはや、警告のために死後のビジョンを見せてくれ、現世の行いを改めるチャンスをくれるような、のんびりした時代ではなくなった。やり直しもきかず、いきなり死後の

世界に送られ、惨めな様子に落とされる（に違いない)。こうして、死そのものが罰と同義になってくる。償いの可能性もうすれる。物語の腕を振るう場所が、罪のところにしかなくなってくるのも、無理はないのであった。

死のイメージが著しく貧困になったことが、ドン・フアン伝説の一面的肥大という歴史的変化の根本にあるだろう。それは、近代文学において罪と罰、性愛の問題を扱う基盤そのものを、極めて不安定で危ういものにしている原因の一つであるに違いない。結局は、生に対するリスペクトの衰弱である。どうやらドン・フアンの遠い親戚らしいファウストやドラキュラやフランケンシュタインもまた、一緒になってその貧困化の穴に落ちていくように思われる。そのことはまた稿を改めて論じよう。

いずれにしてもこういう問題において私は、改めてドン・フアン伝説の源流を探り、その現代的意味を問う必要を感じたのである。

＜参考文献＞

Bolte, Johannes: *Über den Ursprung der Don Juan-Sage*, in: Zeitschrift für Vergleichende Literaturgeschichte XIII (1899). S.374-398.

Grabbe, Christian Dietrich: *Don Juan und Faust.* Frankfurt am Main : Hermann, 1829

Grunau, Simon: *Chronika und beschreibung allerlüstichenn, nützlichstenn und waren historien des namkundigenn lands zu Prewssen*. Hrsg. von Perlbach, Philippi, Wagner, 1875ff.

Helmes, Günter/Hennecke, Petra (Hrsg.): *Don Juan, Dichtungen, 50 Variationen eines europäischen Mythos*. Igel, Hamburg, 1994/2011

Klapper, Joseph: *Eine Quelle der Don Juan Sage*, in:Studien zur Vergleichenden Literaturgeschichte IX (1909), S.190-192.

Klapper, Joseph: *Quellen der Sage vom Toten Gast*, in: Festschrift zur Jahrhundertfeier der Universität Breslau. Mitteilungen der schlesischen Gesellschaft für Volkskunde XIII (1911) S.202-231.

Klapper, Joseph: *Exempla aus Handschriften des Mittelalters*. 1911. Carl Winter, Heidelberg.

Klapper, Joseph: *Erzählungen des Mittelalters*. 1914, Breslau.

Mandel, Oscar (ed.): *The Theatre of Don Juan, A Collection of Plays and Views, 1630-1963.*University of Nebraska Press, Lincoln/London, 1993

Mayer, Hans: *Doktor Faust und Don Juan*. Frankfurt a.M. 1979.

Molière: *Dom Juan ou Le Festin de pierre. Comédie en cinq actes*. Übers. u. hersg. v. Hartmut Stenzel, Französisch/Deutsch, Reclam, Stuttgart, 1989/2012.

Müller-Kampel, Beatrix (Hrsg.): *Mythos Don Juan*. Reclam, 1999

Petzoldt, Leander: *Don Juan Tenorio. Zur Vorgeschichte des Don Juan-Stoffes in der europäischen Volksüberlieferung*. Peter Lang 2013.

Tirso de Molina: *El Burlador de Sevilla*/ José Zorrilla: *Don Juan Tenorio*. studio y notas por Begoña Alonso Monedero, Santillana, Madrid, 1995.
Töppen, Max: *Geschichte der Preussischen Historiographie von P. v. Dusburg bis auf K. Schütz, oder: Nachweisung und Kritik der gedruckten und ungedruckten Chroniken zur Geschichte Preußens unter der Herrschaft des deutschen Ordens*. Hertz, Berlin 1853.
ジャン・ルーセ（金光仁三郎訳）『ドン・フアン神話』審美社、1988 年
ティルソ・デ・モリーナ（佐竹謙一訳）『セビーリャの色事師と石の招客　他一編』岩波文庫、2014 年